

## 第二節 「受賞の言葉」と「選考経過」について

歴代の受賞者の「受賞の言葉」と選考委員による「選考経過」についての文章を収録する。これらの作品は各年に刊行された優れた詩集から選考されたものであり、丸山豊記念現代詩賞の発展の歴史を具体的に語るものである。

### 第一回受賞作品 谷川俊太郎『女に』



#### 〈受賞者メッセージ〉

なによりも敬愛する先輩、友人であり、かつその詩を私自身も愛誦する詩人、安西均、川崎洋のおふたりによって選ばれたことを嬉しく、誇りに思います。また、おつきあいこそありませんでしたが、丸山豊さんの静謐なお人柄は川崎君の口から聞いておりましたし、その作品からもうかがうことが出来ます。たとえば「快癒」一篇をとつても、戦争詩として他に類を見ないものであることはあきらかです。丸山さんにとつての医術と詩の深いつながりを思わせます。その名が冠された賞をいただくことは、私にとって大きな励みです。

一九九二年二月十九日

谷川 俊太郎

#### 選考経過について

丸山豊記念現代詩賞選考委員長 安西 均

同委員 川崎 洋

選考に際しては特に地域を限ることなく、一九九一年中に国内で発行された詩書を対象としました。二月九日、選考開始早々わたしたち選考委員は谷川俊太郎詩集『女に』の受賞に意見が一致しました。

『女に』は、収録した詩のそれぞれにエッチングを配した佐野洋子さん（現谷川夫人）への愛の叙情歌です。二人が生まれる前の絆からスタートし、死んだ後も別れない後生までを三十六篇につづった物語詩でもあります。成熟した詩人の思想と感性が、この詩集によりこれまで青春の歌と思いなされてきた恋愛詩を、「若さ」をはるかに越えた次元に昇華しました。特に谷川俊太郎独特の宇宙感覚が息づいていて、彼のこれまでの詩集の中でもひとつの頂点に立つ詩業と言えます。

以上の緒点を評価し、受賞詩集と決定しました。紛れもなく日本を代表する詩人の一人であり、国際的にも最も知られる詩人の優れた詩集を選考し得たことは、わたしたち選考委員の大きな喜びです。

一九九二年二月十三日

第二回受賞作品 伊藤新吉『上州おたくら 私の方言詩集』



受賞について

はじめ賞のお知らせをうけたとき、久留米と上州（群馬）、そして現住地横浜とはずいぶんの距離、久留米について何を知ってる？ いただいている図々しいのではないかと、戸まどいしました。

同時にまた、誠実な人柄とお聞きしている丸山豊さんに因む詩人賞であり、貴地に由縁りある安西均さん、川崎洋さんがそろって推して下さったことであり、昨年の第一回受賞者が谷川俊太郎さんであったことが一つになって、有難くいただけよ、と思はせました。よろこんで頂くことにしました。光栄に存じます。

なお、この度びの私の詩集は『上州おたくら 私の方言詩集』です。久留米へ参りましたら貴地の方言を、少々なりとも知りたいと思つてます。

思いきや久留米訪めゆく花の春

一九九三年二月十日

伊藤 新吉

選考経過について

選考に際しては丸山豊記念現代詩賞運営要項に則り、一九九二年中に国内で発行された詩書を対象としました。一月一六日に選考委員会を開き、伊藤新吉詩集『上州おたくら 私の方言詩集』に決定しました。わたしたち二人が共通して同詩集を第一候補として選考に臨んだので議論の余地がありませんでした。同詩集は著者の故郷である上州（群馬県）の方言にかかわりのある事柄や方言を織り込んだ作品の中から自選した二五編を集録したもので、それぞれの詩に方言語彙の注釈を付し上州方言圏外にも広く享受されるよう配慮されています。

著者は現在八七歳の高齢ですが、なお旺盛な詩の創作と評論活動をつづけています。かつて近代・現代詩の批評を開拓また萩原朔太郎研究においても第一人者である著作の今回の詩集は、方言を詩文学の次元で動態保存するばかりか、地域文化を見直す必要のますます増大しつつある日本の現状に対する批評および提言にもなり得ていると感じます。

詩人・評論家として大先達に本賞を贈ることは、わたしたち選考委員の大きな喜びです。

一九九三年一月二二日

丸山豊記念現代詩賞選考委員長 安西 均

同委員 川崎 洋

第三回受賞作品 加藤祥造・新川和江『潮の庭から』



〈受賞者メッセージ〉

二人の詩人が互いに詩を書きあうことは、すでに詩の孤獨の輪をつなげる仕事でした。

その小さな輪に、九州という独立の詩圏から賞が与えられたことに、驚きと喜びを感じております。ここに深くお礼を申し上げます。

加島 祥造

ひとつの詩が書きあがった時点で、またそれらの詩が詩集として編まれ陽の目を見た段階で、作者は十分に酬われているものです。その上このように立派な賞まで頂戴して、たいそうまぶしく、面映ゆく存じます。

若年の頃から敬愛申し上げておりました詩人、故丸山豊先生を記念する現代詩賞ですので、喜びは一入でございます。

選考委員のお二方をはじめ、関係者の皆様方に、あつくお礼を申しあげます。

一九九四年二月二十一日

新川 和江

選考経過について

丸山豊記念現代詩賞選考委員長 安西 均

同委員 川崎 洋

選考に際しては丸山豊記念現代詩賞運営要項に則り、一九九三年中に国内で発行された詩書を対象としました。

一月二〇日に選考委員会を開き、早々に意見が一致して、加島祥造・新川和江共著の詩集『潮の庭から』に決定しました。

同詩集は住復書簡ならぬ往復詩といえるもので、著者が互いに呼応し付け合った一連の詩群から成り立っています。そうした形式でこそ初めて可能な親密でのびやかな詩風を生んでいて、読む側にポエジーを味わう喜びを与えます。実は両者はまだ会ったことがなく、その点がまた作品の結晶度を高める一側面として息づいています。

以上の点を評価し、受賞詩集として選考しました。昨年の詩集の中で際立った結果を示したご兩人に本賞が贈られることは、わたしたち選考委員の大きな喜びです。

一九九四年一月二十五日

#### 第四回受賞作品 朝倉勇『鳥の歌』



第四回「丸山豊記念現代詩賞」を受賞して

朝倉 勇

このたびは、久留米市が主催される今年度「丸山豊記念現代詩賞」に私の詩集「鳥の歌」をお選びいただき、まことにありがとうございます。お二人の選者と久留米市および同市教育委員会に、心から敬意を表したく存じます。

私たちの住む地球は、あと数年で二十世紀を終えようとしています。二つの大戦、多くの民族の独立と紛争、東西の冷戦など、戦争の世紀であった二十世紀。そして二十一世紀も秒読みの段階に入りつつありますが、いっこうに明るい見通しは見えてきません。急速に進歩した科学技術がつくる文明は、物質的なゆたかさを生み出すとともに、人間の幸せよりもむしろ自然破壊をふくむ複雑な悪しき問題をふやしているように見受けられます。

こんな地球でも季節にうながされて花は咲き、鳥たちの営みは行われます。そんなかれらがいじらしく思えるのは私だけでしょうか。かれらは小さく弱いものたちです。しかし、私たちにとってどんなに多様な慰めであり、励ましであり、希望でしょう。でもかれらは、なにも言わない。黙々と生命を紡いでいます。私はそんなかれらに人間である自分を恥じながら、鳥の

気持ちや付度(そんたく)してみました。人間に鳥の気持ちなどわからうはずはありません。けれども、そうしないではいられない気持ちにさそわれました。その結果がこの「鳥の歌」です。

選考経過について

一九九四年中に刊行された詩集を対象として、一九九五年一月三〇日に選考委員会を開き、数冊の候補詩集の中から朝倉勇詩集『鳥の歌』(思潮社)に決定しました。

同詩集は(ジョルジュ・ブラックへの手紙)という副題が示すように、著者がジョルジュ・ブラック(仏画家・一八八二～一九六三)が描いた鳥の絵にイメージを触発されて創った作品群その他から成り、その質の高い形而上的リズムを通して、今地球に回復されねばならぬ魂のふるさとを指し示していて、丸山豊の名を冠した本賞にふさわしい優れた詩集であると、わたしたち二人は意見が一致しました。

一九九五年二月五日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋

第五回受賞作品 『みずかみかずよ』『いのち』



「言葉はやさしく心は深く」をモットーに 水上 平吉

「ヤッター」と、かずよは少女のように頬を紅潮させて、こおどりしたに違いない。ぼくは、「本にしてよかつたなあ」と、笑顔の写真に報告し、喜びをかみしめました。

同じ福岡県の大先達である詩人・丸山豊先生の現代詩賞ということが、なによりもうれしいのです。少年詩、児童文学というわく組みを越えて、詩として評価していただいたのです。心からありがとうございます。

「胃がんです。しかも末期で、あと半年か一年の命です。」と医師に告げられ、ぼくに出来る最大の励ましは、本を出版してやることでした。詩集『小さな窓から』、詩とエッセイ集『子どもにももらった詩のこころ』、童話集『ぼくのねじはぼくがまく』を出版しました。かずよは「遺書のつもり私の三冊」という小文を添えました。この三冊を丸山豊先生に見てもらっています。先生から「やさしい言葉のかずかずを消化して居られ、そのやさしい言葉でじぶんの内なるものをよく表現しておられました」「あなたのご本から私も胸のあたりをこつんと叩かれました。もっとやさしくなるように、もっと素直になるように」とのお手紙をいただき、大事にとっていました。

かずよは「言葉はやさしく、心は深く」をモットーに、子どもにも大人にも読んでもらえる詩を書きたいと、最期までペンをとろうとしました。「絵にも書にも音楽にもなればいいなあ」とねがっていました。

選考経過について

一九九五年に刊行された詩集を対象として、一九九六年一月八日に選考委員会を開き、数冊の候補詩集の中から、『みずかみかずよ全詩集いのち』に決定しました。

同詩集は、みずかみかずよ（一九八八年没）が生涯書き続けた詩作品の集成で、夫の水上平吉氏によって編まれた大冊です。己の思想と感性を全開にして、生きとし生ける“いのち”を歌ったその詩は、児童文学の少年詩集という枠を越えて、ポエジの発するみずみずしい光にあふれています。その平明で質の高い表現ともども、丸山豊の名を冠した本賞にふさわしい優れた詩集であり、受賞詩集として決定した次第です。

一九九六年一月一五日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋

## 第六回受賞作品 安水稔和『秋山抄』



いざとああ

安水 稔和

受賞のお知らせをいただいたあと、丸山さんからいただいた詩集を書庫から取り出して再読した。『草刈』から『微安心』までと戦記『月白の道』である。

詩集『球根』の「あとがき」にはこんな文章がある。「詩は『いざ』という志と『ああ』とをいう咏嘆との二つに尽きる」。「真の『ああ』を所有することは至難であるし、人間の『いざ』にいたっては雲のなかである」。

また、詩集『微安心』の「あとがき」では題の微安心という語について、これは造語であって「安心の微量は不安の多量を意味する」と記されている。「これが最後の詩集のつもりである」とも記されていて、詩集の出たその年に本当に丸山さんは逝ってしまった。

詩集をいただいたときも、亡くなられたと知ったときも、いざとああ、そして微安心ということばがわたしの眼前に立ちあがったものだ。そして、このたびもまた。

神戸生まれの神戸育ちのわたしがどうしたわけか北へ向かいがちだ。能登へ、佐渡へ、東北へと。『西馬音内』は秋田の地名。『異国間』は青森の地名。『記憶めぐり』に出てくる地名

は東北・北海道が大半を占めている。受賞詩集『秋山抄』は新潟と長野の県境にまたがる雪深い谷が舞台である。中国山地・広島・瀬戸内・阿蘇・屋久島・老岐・対馬を舞台にした作品もあるが、このところわたしの目は北を向き、わたしの体は北へ向かっていった。

このたび、思いもかけず声をかけていただいた。一度も降り立ったことのない久留米からのお声。お会いすることはなかった丸山さんからのお声。ひそかに敬愛するそのお声に導かれて、わたしのいざとは、わたしのああとは、細々とたどるわたしのことばの旅の行く末は、今立ちどまって考えているところです。

選考経過について

一九九六年に刊行された詩集を対象として、一九九七年一月十六日に選考委員会を開き、数冊の候補詩集の中から、安水稔和詩集『秋山抄』に決定しました。

同詩集は、民俗誌の先駆的業績として評価の高い鈴木牧之（一七七〇～一八四二）の『秋山記行』の秋山郷を訪ね、牧之の心の跡をていねいにたどりつつ、時間と空間から落ちてくる水滴を現代に蘇らせた詩作品の集成です。その言葉の紡ぎ方は非常に魅力があり、現代詩が顧みることの少ない領域のポエジーを実感とともに伝えていきます。以上のような点に敬意を覚えつつ、一致して受賞詩集として決定しました。

一九九七年

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋

第七回受賞作品 相澤史郎『夷歌』



受賞に際して

相澤 史郎

私は丸山豊先生には、生前にお会いしたことはありませんでした。ですが戦後詩の一つの発火点であった「母音」の主宰者であり、九州から東京を睨んでいるすごい詩人であることは知っていました。高い見識と深い思想の持ち主であった丸山豊先生のもとに集まった詩人たちもすばらしい集団でした。私は指をくわえて遠くから眺めているだけでした。

そしてこのような賞を頂くなんて、夢にも思いませんでした。私はいつも賞の埒外にあって詩を書いているものと一人合点をしていました。日本の詩は生まれて百年、和歌や俳句と違って、欧米文学の支店になり下がり、方言退治の片棒を担いできたようですので、方言詩などは誰も問題にしませんでした。ですから私は、一徹にわが道を行くと決めて蛸壺に入っておりました。いま川崎洋先生と森崎和江先生に、蛸壺から引き出されました。この賞は、私個人だけではなく、北方の地でこの言葉を守り続けてきた父たちや母たちの文化に与えられたものと、私は思っています。同郷の人たちも「さすが九州！」と大変に喜んでいきます。

選者の二先生には深く感謝いたしますと同時に、丸山豊賞お

よび関係者の方々に心から敬意を表します。

選考経過について

一九九七年中に刊行された詩集を対象として、一九九八年一月十九日に選考委員会を開き、それまでに絞った九冊の候補詩集の中から、相澤史郎詩集『夷歌』に決定しました。

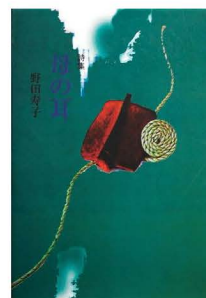
同詩集は著者が生地岩手県北上地方の言葉で書き続けてきた第五冊目の詩集に当たります。「北の精神は北のコトバで語らなければならぬ」とする著者の思想が、単なる意味伝達ではない、肉体と心が一緒になったコトバによって詩に表現を得ていて、まことに感銘深い作品になっています。以上のような点に敬意を覚えつつ、一致して本詩集を推挙いたしました。

一九九八年

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋

第八回受賞作品 野田寿子『母の耳』



受賞に際して

野田 寿子

若い日、自分流に書きためた詩のノートを携えて、おずおずと丸山豊先生の診察室に伺った私は、幸せにもその日から詩誌「母音」に加えていただき、多士濟々、議論あふれる丸山サロンで採まれることになりました。豊先生はその様子をにこにこで見守っておられました。

以来四十年、皆それぞれの道に岐れ、私も自分の人生の中で詩を書きつづけてきた或る日、本の中の豊先生の言葉に出会いました。「私は二つのものを憎む。一つは戦争、もう一つは驕慢である。」と。「あの戦いを経て市井に生きる今、一見平和な日常の中に潜む非人間的なものを鋭く見究めながら、ここに生き徹する雄々しさを持ちたい。」とも。豊先生の穏やかさは、真の詩心に徹したことの勁さだったのだと知りました。今度、その御名を冠した賞をいただくに当り、喜びと共に身のひきしまる思いです。

ご厚情いただいた川崎洋氏、森崎和江氏に深く感謝しつつ。

選考経過について

選考に際しては、これまでどおり、特に地域に限ることなく一九九八年中に国内で発刊された詩集を対象としました。本年二月二十四日の選考委員会で、野田寿子詩集『母の耳』（土曜美術出版販売）に決定いたしました。

同詩集はI部とII部に分かれています。特にI部の、作者の父母・姉弟へのふかいまなざしは読者に、いのちの流れへの真摯な視線をうながし、大きな感動を与えます。その平明で質の高い表現は、丸山豊の名を冠した本賞にふさわしいすぐれた詩集であり、贈賞詩集として推挙する次第です。

一九九九年二月二十七日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋